

# バヌアツにおけるマンガッジ式土器の一様相

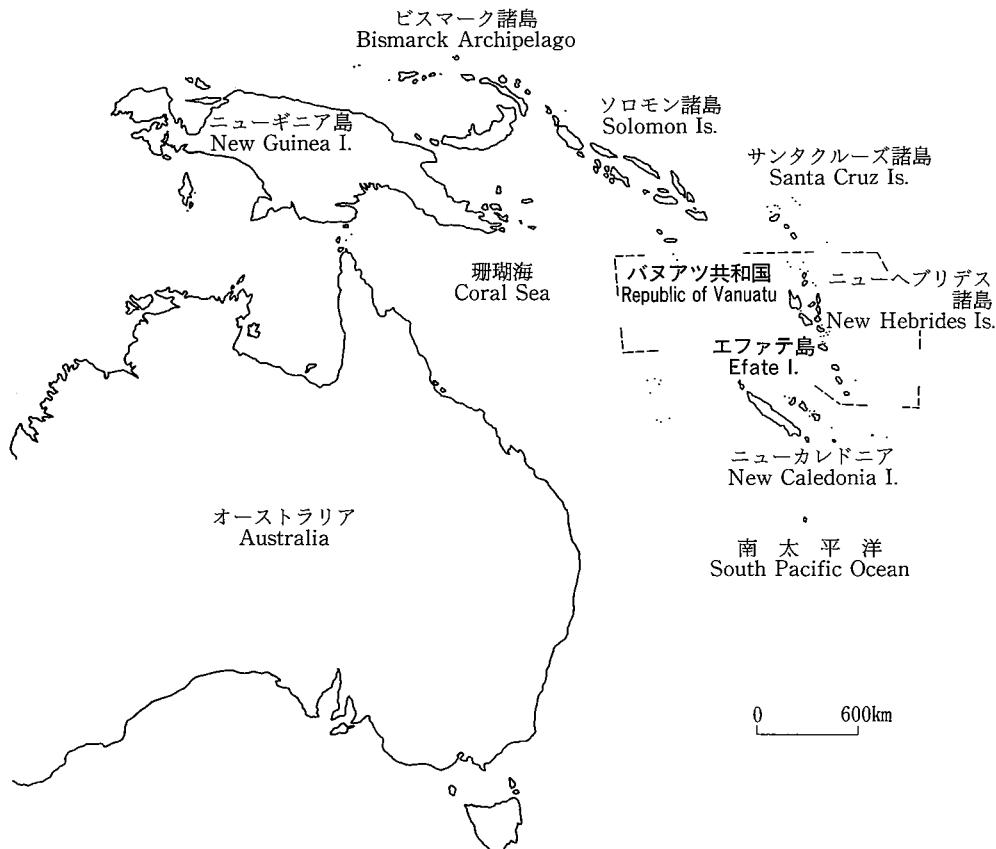
## —エファテ島マンガリュー採集のマンガッジ式土器をもとに—

中野拓大・相原淳一・磯目隆夫・篠遠喜彦

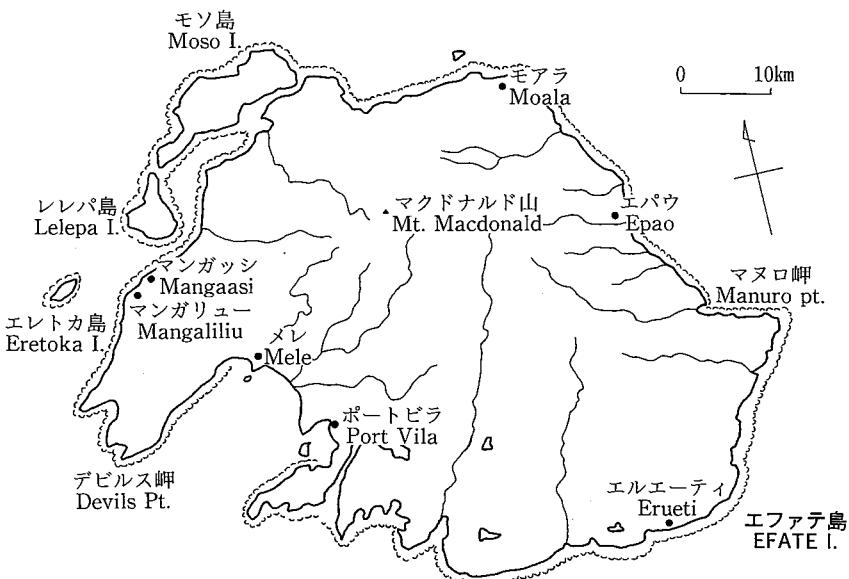
### I 序

バヌアツ共和国は南太平洋に浮かぶ島国である。赤道の南、オーストラリア東海岸から東に約1,750kmの所に位置し、約80の火山島や隆起サンゴの島々から構成される(第1図)。1980年に、イギリスとフランスの共同統治から独立した。気候は熱帯あるいは亜熱帯性で、一年が雨季と乾季に別れ、年中高温である。首都は、国の中北部にあるエファテ島にあるポートビラである。人口は約16万人で、そのうちの90%はメラネシア人で占められる。

かつて、エファテ(Efate)島(第2図)から、日本の縄文土器に酷似する土器が出土していることが報じられている(芹沢1972)。その真偽を確かめるべくハワイのビショップ博



第1図 バヌアツ共和国の位置



第2図 バヌアツ共和国エファテ島

物館の篠遠喜彦人類学上席特別研究員はこの土器の研究に乗りだし、1997年度からは、土器が出土したとされるエファテ島メレ(Mele)村において実地調査を行った。この調査に、磯目・相原・中野は有志として参加した。2年次にわたる調査で、縄文土器に関連するデータを得ることはできなかったものの、現地の土器であるマンガッシ(Mangaasi)式土器を表面採集や試掘によって、多数得ることができた。特に98年度の調査では、土器に興味を持った地元の人々がメレ内外で多数の土器を採集し、筆者らのもとに持ってきてくれた。このうちメレの資料に関しては、他のメレの資料と共に報告をまとめる予定であるが、メレ以外の資料の中に、マンガッシ式土器の標式遺跡(マンガッシ遺跡)のごく近くにあるマンガリュー(Mangaliliu)という集落(第3図)で採集された土器が多数含まれていることがわかった。このため、これらの資料に関しては、メレの資料と比較する必要性があると考えたので、本誌上において検討していくことにしたい。

## II バヌアツの先史時代土器の概要と研究の現状

バヌアツ共和国は地域的にはメラネシアに属し、その先史文化もメラネシアの特徴を持つ。メラネシアは古くから土器が大量に製作されている地域であり、土器編年によって時期区分、地域区分をすることが可能である。しかし、その土器編年は現状では非常に大ま

かなものであり、その細分化はこれから課題といえる。最も年代的に遡るのは、ラピタ式土器と呼称される非常に細密な刺突文によってさまざまなモチーフが描かれる土器である。このラピタ式土器は、ニューブリテン島やソロモン諸島、ニューカレドニアなどのメラネシアから、サモアなどのポリネシア西部に至る広大な地域に分布し、ポリネシア人の南太平洋への最初の拡散を示すものとして非常に注目されている土器である。バヌアツでも、このラピタ式土器は各地で出土している。ラピタ式土器にやや後続して出現するといわれるのが、ラピタ式とは全く異なる沈線文や貼付文を特徴とする土器群で、メラネシア一帯に分布し、バヌアツにおいてはマンガッジ式土器と呼称される。<sup>14</sup>C年代から、ラピタ式土器は紀元前約1,500年～西暦0年頃まで継続したとされ、マンガッジ式土器は、紀元前700年頃～西暦1,600年頃まで継続したとされる (Bellwood 1978)。すなわち、ラピタ式土器とマンガッジ式土器は時間的に重なる時期を持ちながらも、次第にマンガッジ式土器に変遷していくということである。西暦1,200年～1,600年頃になるとバヌアツでは次第に土器が製作されなくなるが、全く消滅したわけではなく、北部バヌアツのエスピリット・サント (Espiritu Santo) 島のウシ (Wusi) では、隆帶文や沈線文で装飾され赤色スリップが塗られた土器が現在も製作されている (Galipaud 1996)。

バヌアツにおける土器の変遷を非常に大まかに見ていくと以上の通りとなるが、近年の発掘では、ラピタ式土器からマンガッジ式土器の移行期の様相が次第に明らかになりつつある。そこで、本誌上で紹介するマンガッジ式土器に関連する過去の調査と最近の調査の事例について簡単に触れてみたい。

フランス人考古学者ジョセ・ガランジェは1966年と67年にエファテ島の南にあるエルエーティ遺跡とマンガッジ遺跡を調査している (Garanger 1971)。マンガッジ遺跡では、124 m<sup>2</sup>の調査範囲を地表から150cmのところまで掘り下げた。ガランジェの報文によると、層位は4層に分かれ、地表から50cmぐらいまで表土層 (I) が続き、50cm～70cmのレベルで貝やサンゴ、砂が混じる無遺物層 (II) となり、80cm～150cmのレベルで15,000点にのぼる土器が包含されていた層 (III) が堆積し、150cmのレベルでサンゴとパミスの混じる無遺物層 (IV) になるという。そして、土器が大量に包含されていたIII層は、頻繁な津波と耕作による攪乱によって層位を分層できなかつたために、人工的に20cmおきに掘り下げることによって調査を行った。その結果、連続しない貼付文レリーフや動物の頭を模したと思われる把手などを特徴とする土器が100～150cmのレベルでより高く出現する傾向にあり、多彩な沈線文モチーフや表面に刻み目などの装飾を施す隆帶レリーフを多用する土器が上位の層で出土していることを指摘した。そして、前者を「前期マンガッジ式」(Early Mangaasi)、後者を「後期マンガッジ式」(Late Mangaasi)と呼称した。なお、130cmのレベルから出

土した木炭サンプルの<sup>14</sup>C年代は、495±80B.C.の数値を示し、100cmのレベルから出土した木炭サンプルは、645±95B.C.の数値を示している。

一方、エルエーティ遺跡では、1967年の発掘で地表から40cm～60cmの深さで5,000点もの土器が出土した。そのうち、6点のみがラピタ式の文様が施される土器で、他のほとんど全てが装飾のない土器であった。この土器の特徴は、口唇部が広い平坦な面を持ち、口唇外縁に刻みが施され、その上の平坦な面に直線や列点によって装飾が施され、胴部以下は全くの無文になることである。この土器群はラピタ式最終末の様相を示すと考えられている。他に遺跡の至る所からマンガッジ式土器がみつかっており、特に前期マンガッジ式土器に特徴的な連続しない貼付文施文の土器は上位の層からは出土せず、地表から60cm～80cmの深さで出土している。ガランジェは、エルエーティ遺跡においては前期マンガッジ式土器を口唇以外無文の土器群より古く位置づけているが、木炭サンプルの<sup>14</sup>C年代が350±95B.C.の数値を示すことから、結局のところは両者は併行するものとみなしている。しかし、最近の発掘のデータはガランジェの見解とは異なる結果を示している。

1996年と1997年の2年次にわたる調査で、オーストラリア国立大学(ANU)のスチュワート＝ベッドフォード、マシュニスプリッグスらは、ガランジェがかつて調査した地点に再度試掘坑を入れ、地表から3.6mまで掘り下げるこによって、層位関係をより明確に把握することに成功した(Bedford・Spriggs他1998)。この調査において、最下層からは、エファテ南海岸に位置するエルエーティ遺跡出土の土器に酷似する口縁部に刻み目に入る以外はほとんど無文の土器群が出土し、その上のレベルからは、貼付文が施されない沈線文と刺突文・短沈線のみによるマンガッジ式土器が出土した。これらの土器は、紀元100年の年代を示すアムブリム(Ambrym)島の火山噴火に由来する火山灰層よりも下層から出土し、エルエーティ類似土器の出土レベルの<sup>14</sup>C年代は、B.C.850年を示した。ガランジェが前期マンガッジ式土器と呼称した連続しない貼付文や把手がつけられる土器は、アムブリム島の火山噴火に由来する火山灰層の上から出土し、より新しいものであることがわかった。なお、<sup>14</sup>C年代は、A.D.175-617年の数値を示した。

その結果、ガランジェが前期マンガッジ式とした土器以前に古く位置づけられるマンガッジ式土器の系譜に連なる土器の存在が明らかとなり、ガランジェのマンガッジ式土器の細分案および彼の調査で出た<sup>14</sup>C年代は再検討が求められることになった。

スプリッグスらのマンガッジ遺跡の調査結果からすると、少なくともエファテ島においては、ラピタ式土器最終末の様相を示すと思われるエルエーティ遺跡の土器に後続して、沈線文と短沈線・刺突文のみの文様構成のマンガッジ式土器が存在し、ガランジェの提示した前期マンガッジ式土器はそれらよりも新しいことが明らかになり、ラピタ式土器から

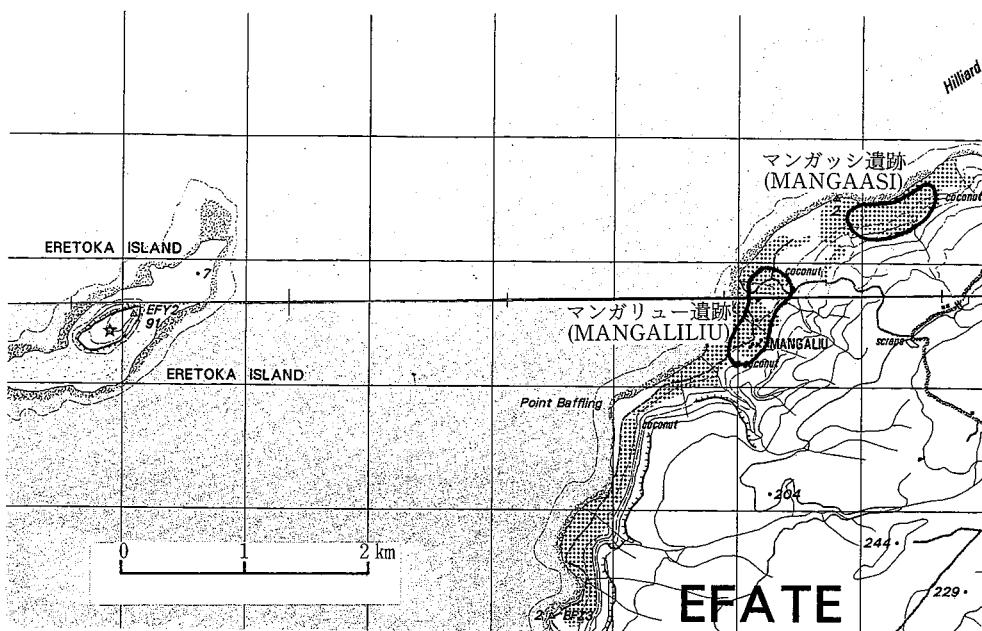
エルエーティの土器を経てマンガッジ式土器に移行することが示された。スプリッグスの調査の結果、ガランジェの発掘地点はかなり攪乱されていることがわかり、層位的に前期と後期の区別をつけることは難しくなったが、ガランジェが前期マンガッジ式土器としたもののうち、瘤状の貼付文や把手が施されるものは後期マンガッジ式土器とは明らかに特徴が異なっており、両者を異なる型式として区分することは可能であろう。筆者らがメレで調査した時に出土した土器にも、瘤状の貼付文が施されるものはごく少数であり、後期マンガッジ式土器としたものとは時間的に異なると思われる。もう一度、層位的な検討が必要になるが、筆者は基本的にガランジェの示した前期マンガッジ式と後期マンガッジ式の時間的な順序は合っているのではないかと考えている。そして、前期マンガッジ式土器の前に、貼付文の含まれない沈線文と刺突文・短沈線から文様が構成される土器がマンガッジ式最古段階として位置づけられるということによって、マンガッジ式土器が現段階で3段階に細分できるのではないかと考えている。

このように、バヌアツにおける土器の年代は、火山灰の噴出年代と<sup>14</sup>C年代によってある程度明らかになってきている。しかし、土器の文様や器形をもとにした編年研究はまだこれからの段階である。

他にマンガッジ式土器について特筆されることは、西暦1000年以降、後期マンガッジ式土器がニューカレドニアやフィジー方面の土器に大きく影響を与えるようになり、特にフィジーでは今日までつくられている土器のルーツが、かなり変容してはいるものの後期マンガッジ式土器に求められることである (Bellwood 1978)。北部バヌアツのウシの土器も含めて、今後、民族学的なアプローチと考古学的なアプローチの結びついた研究が期待できる分野である。

### III マンガリュー遺跡の立地

マンガリュー遺跡はバヌアツの首都ポートビラから西に約15kmのエファテ島南西海岸の集落に位置する (第3図)。マンガリュー集落は海岸から3・4 mほど上がった場所に立地している。集落東側には、低木に覆われた隆起サンゴの崖がそびえ立つ。集落の北側はタロイモ畑やココナッツの林となっている。1997年に筆者らが現地を訪れた時には、畑に土器が散布しているのを確認できた。畑の一角には大量の土器が1ヶ所に集められていたことから、地表以下にかなりの土器が包含されている層が存在するものと思われる。マンガリューの北1 kmの所には、マンガッジ式土器の標式遺跡であるマンガッジ遺跡が存在する。マンガリューとほぼ立地条件は一致している。マンガリューの海を挟んだ西方には、レレパ (Leleppa) 島やエレトカ (Eretoka) 島をのぞむことができる。エレトカ島は、帽子に



第3図 エファテ島西岸マンガリュー遺跡

似た島の形からハット（Hat）島とも呼称される。

#### IV 資料紹介

##### 資料の概要

マンガリュー遺跡採集の土器は1998年7月筆者らがメレ村において調査を行っていた時、メレ村在住の村人たちが持ってきてくれた資料に含まれていた。土器は合計477点で、そのうちの103点を図示した(第4図～第8図)。477点中、240点が有文の破片で、237点が無文の破片である。部位の内訳は、口縁部破片が18点、頸部破片が14点、胴部破片が438点、底部破片が7点である。

##### 遺存状態

ほとんどのものは風化を受けているが、文様が消えてしまうほど著しいものは少ない。ただし、一部に磨滅しているものや石灰分が付着しているもの(第5図34、第6図50、第7図66、第8図98)がある。

##### 器形の特徴

全体の形がわかるだけの大きさの破片がないので、推定となってしまうが、従来指摘されてきたマンガッ式土器の標準的な器形と同様、円形・球形を呈するものがほとんどと思われる。

##### 口縁部の特徴

ほとんどが内湾する。口唇がそのまま内傾するものと、屈曲してまっすぐ立ち上がるものがある。口唇は、丸みをおびるもの（第4図1～4・8・10・16）と先細りするもの（第4図5・13・15）とがある。口唇に連続刺突文が施されるものがある（第4図13、第8図99）。いずれも外側に施文される。

### 底部の特徴

丸底が主である（第8図101～103）。胴部下半の破片と識別しにくい。大型の土器の破片と考えられるものは、器厚が2cmを越えることがある。

### 器厚

大概厚手で、10mm前後のものが多い。一方で、小型の土器と考えられる破片には7mm前後の薄手のものが存在する（第4図3・4）。

### 輪積み痕

一部の破片には、明らかに輪積み痕が確認できるものが存在する（第6図50、第7図64）ものの、日本の縄文土器の割れ方に多く見られる輪積みの境目から割れているものは少ない。土器の表面や割れ口を観察すると粘土の特徴のためか大きくひびが入るものや、割れ口が階段状になっているものが存在する。

底部破片など厚手の破片の割れ口を観察すると、器面に平行して粘土帯同士を接合した痕跡が確認できるものがある。各粘土帯を接合した後、かなり上下に引き延ばしているものと思われる。

### 胎土

マンガリュー遺跡の土器の胎土の特徴として、多くの土器に白色粒子が混入されていることが挙げられる。中でも、大きさが2mmを越えるようなものが特徴的に存在することから、2mm以上のものを粗粒、それ以下のものを細粒に分けることにした（第1表・第2表）。この粒子は破碎されたサンゴが主で、他にパミスなどの火山噴出に由来する物質も含まれる。この白色粗粒が入っている土器の割合は、477点中234点とほぼ半分を占める。筆者らが調査したメレの土器にはこのような白色粗粒が混入されるものは少ない。さらにスプリッターグスラが調査したマンガッジ遺跡でも、下層から出土した前期マンガッジ式土器には胎土自体に混入物がほとんど含まれていない。この白色粗粒を胎土に混入する手法はマンガリュー特有の手法の可能性がある。

この他の混入物として、輝石、斜長石、石英、その他の火山噴出に由来する物質（スコリアなど）が存在する。この中最も混入率が高いのは輝石で、3分の2の土器に混入されている。エファテ島の土器には大抵混入されており、この島の特徴といえる。メレ村や首都ポートビラ近辺には、砂に大量の輝石が含まれるために海岸が黒く見える場所がある。

このような混入物は、明らかに意図的に混入していると考えられ、その特徴を調べることによって、各時期、各地域のそれぞれの土器様相がより明確にすることができるものと思われる。

### 器面調整

口縁部・胴部上半を中心に丁寧に調整されているものが多い。風化して判別できなかつたものを除くと、ほとんどの個体に何らかの調整が施されている。これらの調整は、指やへら状の工具によるものと考えられる。外面も内面も横方向にナデ調整されることが多い。

文様が施文されるものは、施文前に調整されるものがほとんどで、施文後の調整は、隆帯を貼り付けた後形を整えるためなどに限られる。

変わったものとして、施文前に斜め方向から条線を残すナデ調整が施されるものが挙げられる(第7図76)。スプリッグスらが調査したマンガッシ遺跡出土の貼付文が含まれない段階のマンガッシ式土器には、斜め方向から指でなぞるように調整するものが存在することから、両者は関連性を持つかもしれない。

### 文様

#### ・文様帶

口縁部文様帶と胴部文様帶に分かれるもの(第4図6~9)と単一の文様帶のもの(第4図10)がある。屈曲部を持つものは口縁部文様帶を持つことが多い。文様帶の間は、連續刺突文、隆帯文などで分けられる。口縁部文様帶は刺突文によるものが多く、胴部文様帶は区画文などによるもの多い。マンガッシ遺跡出土の復元土器(Garanger 1971)には2つの文様帶をさらに囲む三角形の隆帯がめぐる。

#### ・モチーフ

三角形・四角形を基調としたものが多い。直線的なモチーフが多いが、少数木の葉状を表す曲線的なモチーフも存在する(第5図41~44)。他に2条の平行沈線文の間に連續刺突文を施すものや1条の沈線の両側に連續刺突文・連續短沈線文を施すものも特徴的に存在する。

#### ・分類

文様から大きく7つに類別した。

**第1類 沈線文による区画文**によって文様が構成されるもの(第4図10・12・17・19・2022、第5図23~44、第6図45~48・62、第7図66・69・71~73、第8図90)

a種 区画内に平行沈線文が充填されるもの(第4図12・17・19・22、第5図23~38・43・44、第6図47、第8図90)

17は三角形の沈線区画の中に縦位の平行沈線文が充填されている。24・30は、菱形の沈

線区画の中に縦位の平行沈線文が充填されている。25・26・29は、四角形の沈線区画の中に縦位の平行沈線文が充填され、市松状の意匠を表す。12・27・31・32は縦横に区画された中をさらに斜位の沈線文で区画し、その一方が縦位平行沈線文によって充填される。19・22・23・28・38・47・90は、沈線文と刻み目の付く隆帯文の間のスペースに平行沈線文が充填されている。33～37は各区画に斜位や横位の平行沈線文が充填されている。44は木の葉状のモチーフの中に平行沈線文が充填されている。

b 種 区画内に格子目状に沈線文が充填されるもの（第4図6・20、第5図39～42、第6図48）

6は、内湾し口唇が立ち上がる口縁部資料で、口縁直下には、ハの字状を呈す短沈線文が連続して施文される。橢円形を呈す連続刺突文の下には、帯状の格子目文が施文される。20・39・40・48は縦横の沈線区画の中に格子目状に沈線文が充填される。42・45は三角形の区画の中に格子目状に沈線文が充填される。41は木の葉状のモチーフの中に格子目状に沈線文が充填される。

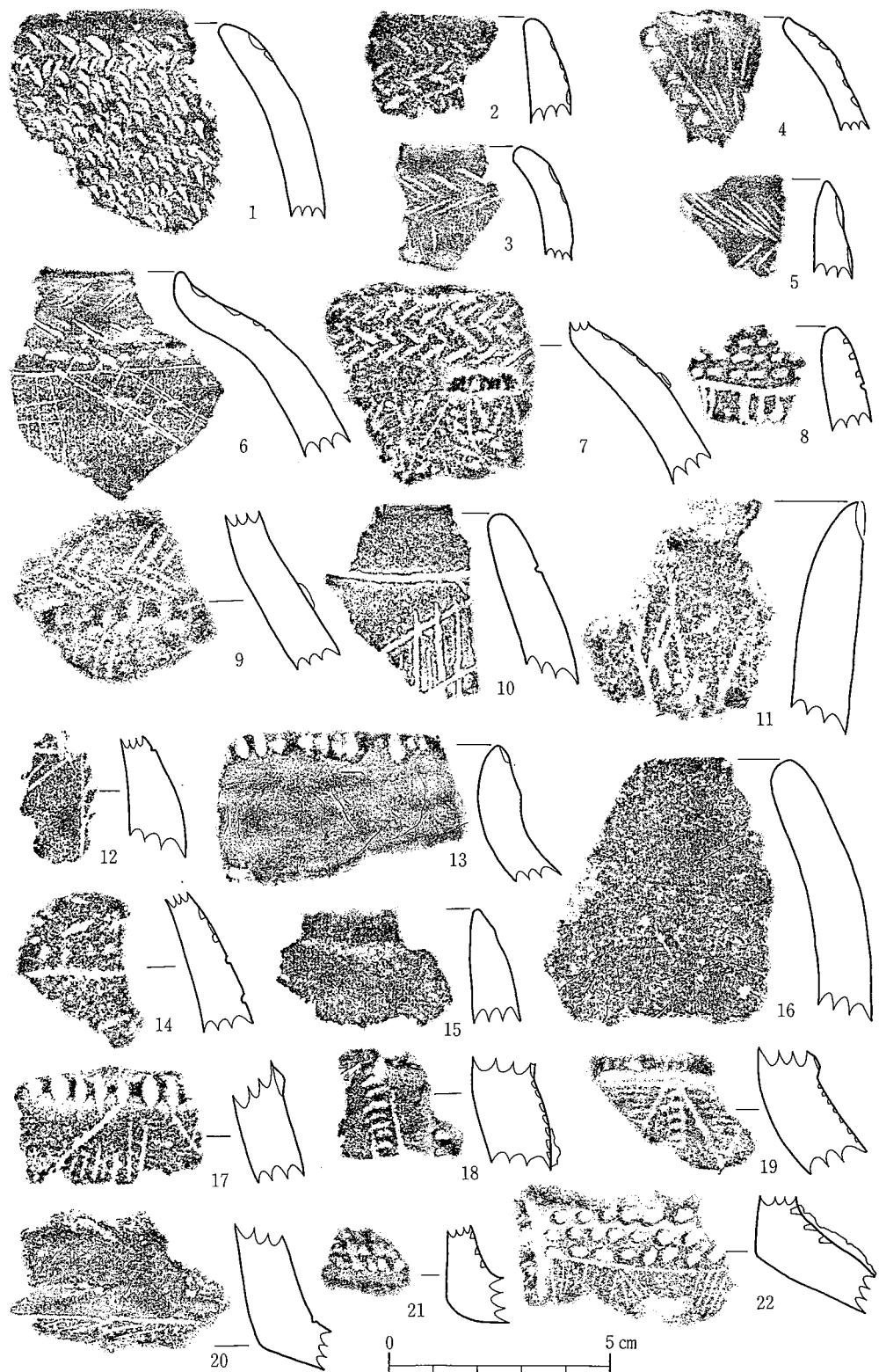
c 種 区画内に刺突文あるいは短沈線文が充填されるもの（第6図46・62、第7図66・69・71～73）

46は四角形の区画内にV字、縦線、山形の3つの意匠の短沈線文が充填されている。62・66は1条の沈線文の左側に短沈線文がハの字状に充填される。66には石灰分が付着している。71は間隔をおいて施文される2条の縦位平行沈線文の間に左斜めを上に連続する短沈線文が3列、縦位に施される。72は2条の横位平行沈線文の間に刺突文がランダムに充填される。73は1条の縦位、横位の沈線文で区画された中にハの字状を呈す連続する短沈線と角棒状の工具による断面三角形の連続刺突文が施される。

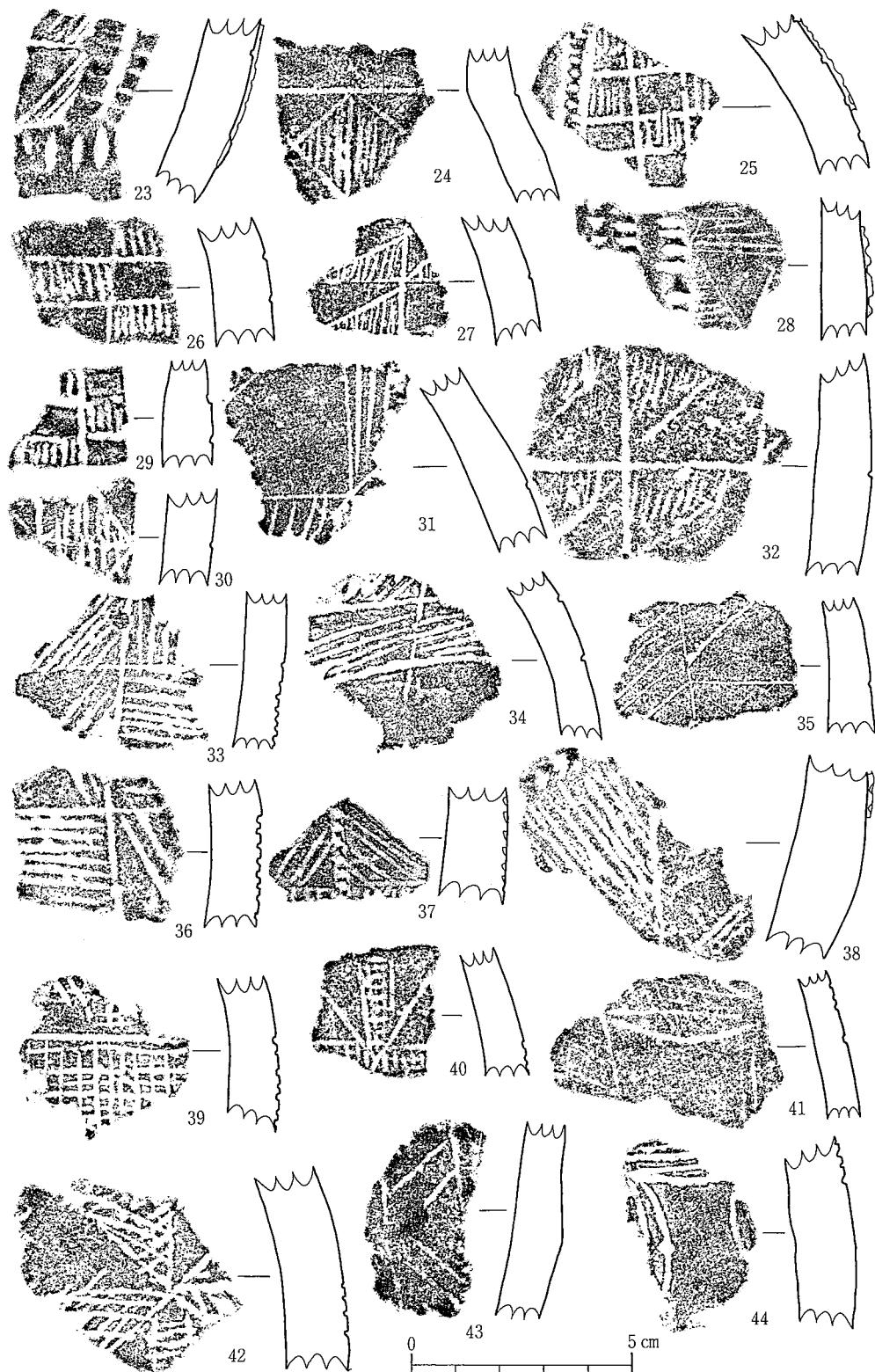
第2類 平行沈線文と連続刺突文の組み合わせを基調に文様が構成されるもの（第4図4・11・18・21・22、第5図37、第6図47～61・63、第7図64・67・68・70・74・77・78・81、第8図101・102）

a 種 2条の平行沈線文の間に連続刺突文あるいは連続する短沈線文が施文されるもの（第4図4・11・18、第6図47・48・50～61・63、第7図70、第8図91・92）

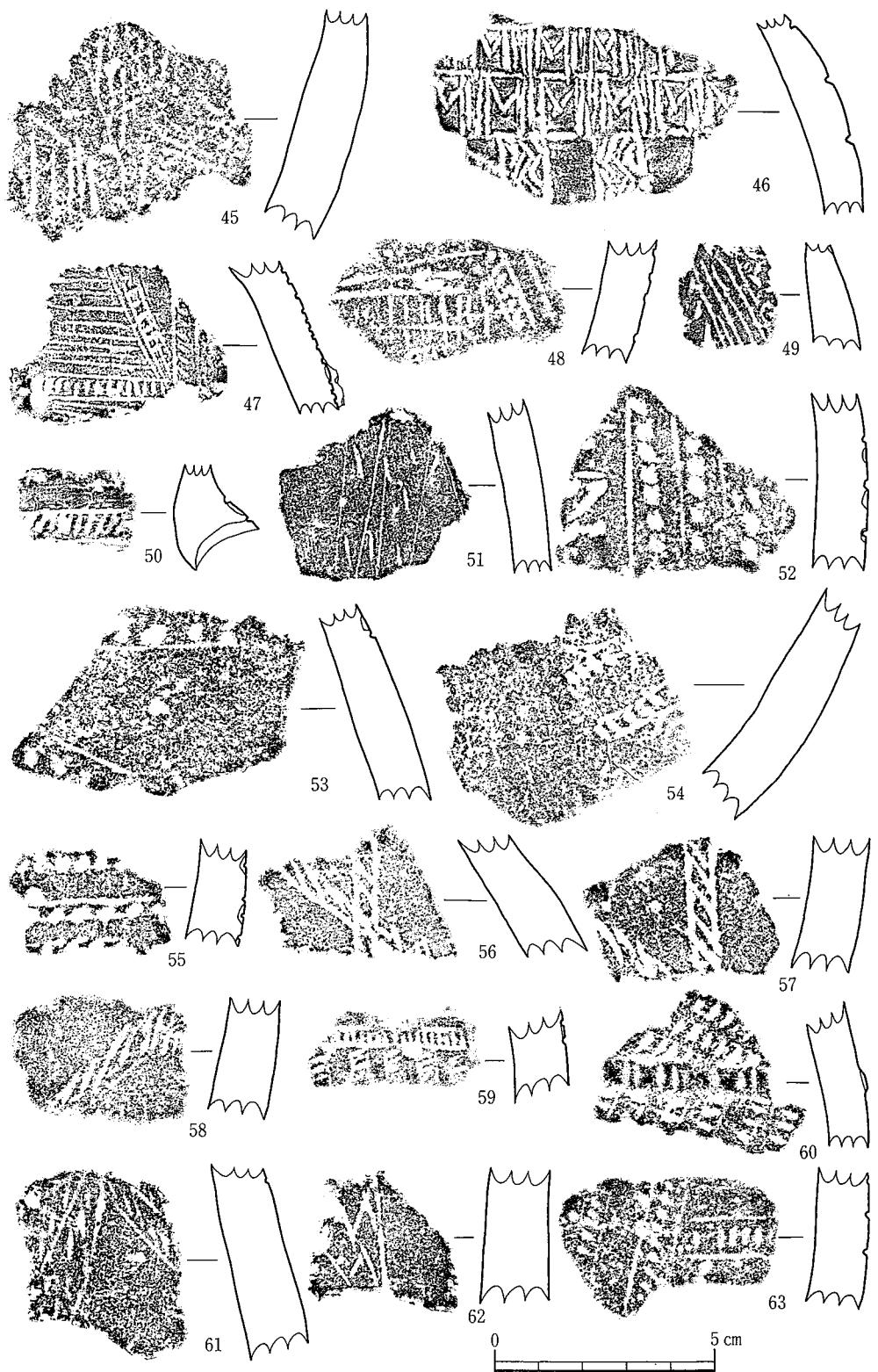
4は1条の沈線文が口縁から斜め方向に施され、その左側には沈線文と平行して三角形を呈す連続刺突文が施される。沈線文の右側には短沈線文が3段にわたって充填される。18は三つ歯の工具で連続刺突文が施文される。50は下の部分が輪積みで割れている。表面には石灰分が付着する。11・51・56・57・58・61は2条の平行沈線文の間に連続する短沈線文が施文される。52～55は、2条の平行沈線文の間に平行沈線文と同じ方向から連続刺突文が施文される。59・60・63・70は平行沈線文と直交する方向から連続刺突文が施文さ



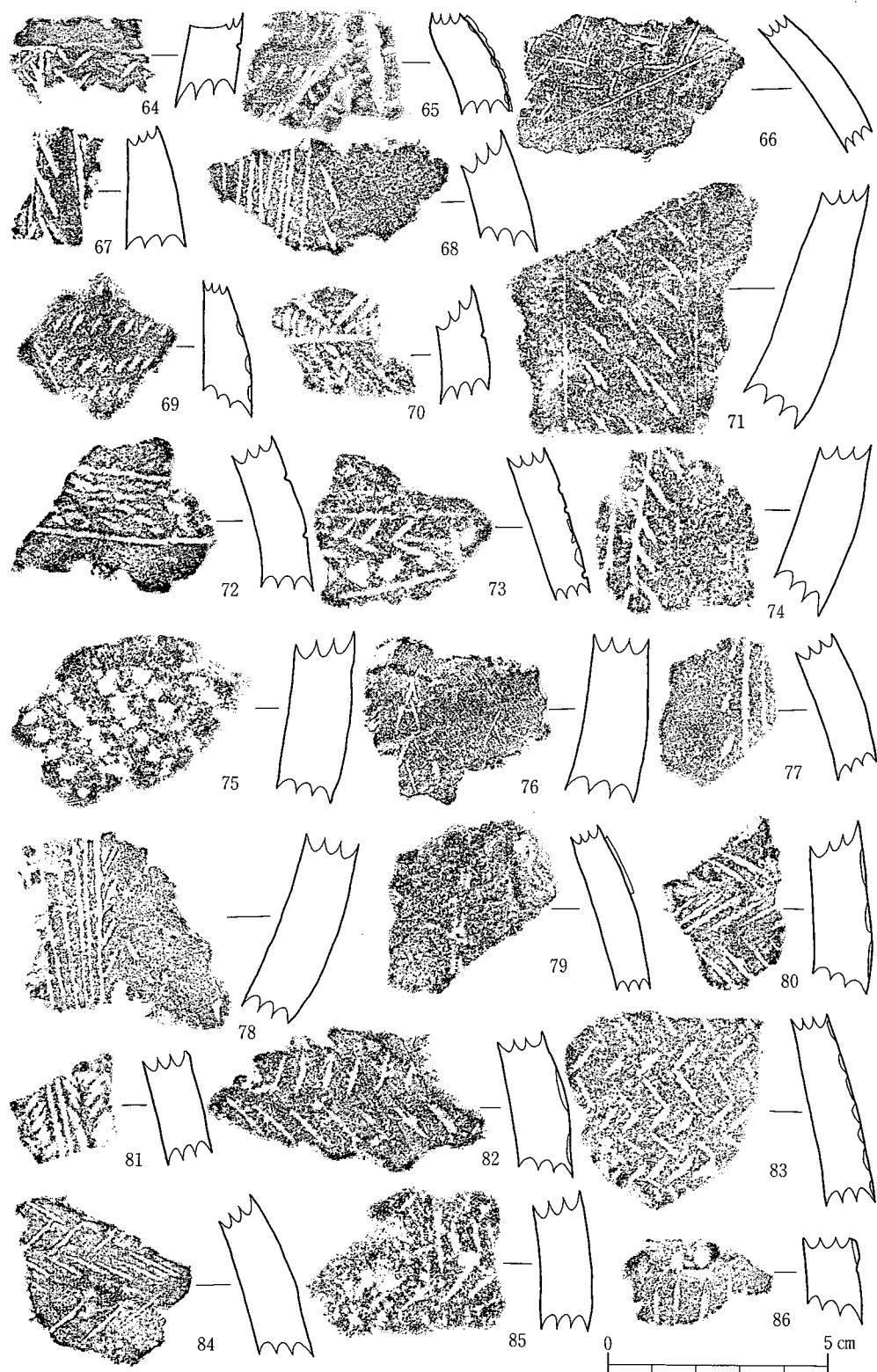
第4図 バヌアツ共和国エファテ島マンガリュー遺跡採集の土器(1)



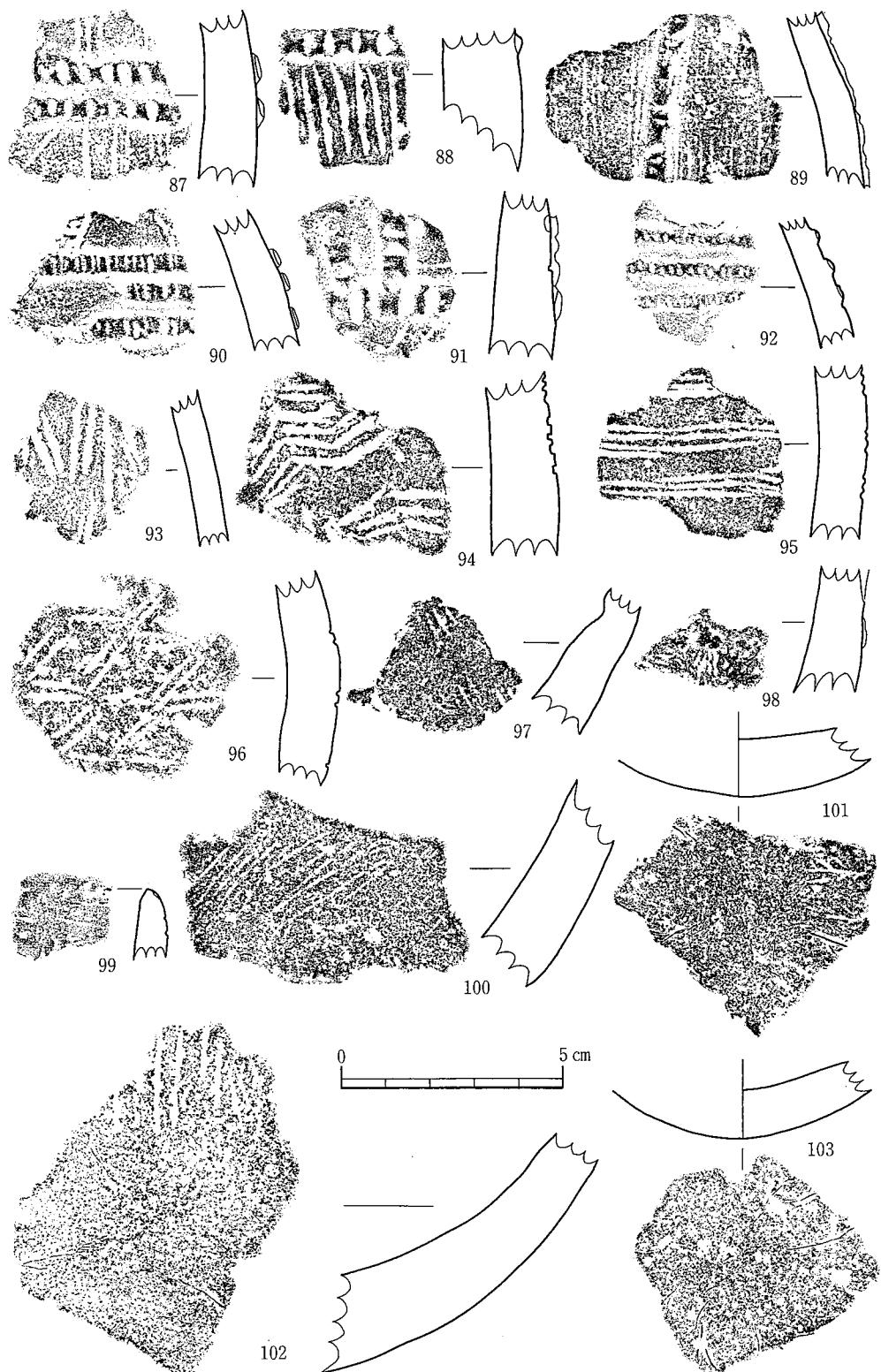
第5図 バヌアツ共和国エファテ島マンガリュー遺跡採集の土器(2)



第6図 バヌアツ共和国エファテ島マンガリュー遺跡採集の土器(3)



第7図 バヌアツ共和国エファテ島マンガリュー遺跡採集の土器(4)



第8図 バヌアツ共和国エファテ島マンガリュー遺跡採集の土器(5)

れる。

91は楕円形を呈す刻み目の付く隆帯が縦横にめぐり、その周囲に沈線文、刺突文が施される。92は、細かい刻み目の付く隆帯が横位に3段に渡って施され、その上には2条の平行沈線文の間に連続刺突文が施されるモチーフが斜位に施される。

b種 1条の沈線文の両側または片側に沿って連続する短沈線文あるいは連続刺突文が施文されるもの（第7図67・74・81、第8図101・102）

67は縦位平行沈線文を施文した後、左側の沈線文の両側にハの字状を呈す連続する短沈線文が施される。74は、2条の平行沈線文が縦位に施され、その右側に沈線文に沿って短沈線文が縦位に施される。81は横位隆帯の下に2条の平行沈線文と逆ハの字状を呈す連続刺突文が縦位に施される。101は胴部下半から底部にかけての破片と思われ、平行沈線文が縦位に施され、その右側に沿うように連続する短沈線文が施される。102は、ほぼ底面の破片と思われ、1条の縦位沈線に沿って連続する短沈線文が施されるモチーフが垂下する。

c種 平行沈線文の外側に沿って連続する短沈線文あるいは連続刺突文が施文されるもの（第6図49、第7図68・77・78）

49・68・77は、平行沈線文の側から斜位に連続刺突文が施文されるが、78は平行沈線文に向かって斜位方向に連続する短沈線文が施文される。

第3類 刺突文、あるいは短沈線文によって主体的に文様が構成されるもの（第4図1～3・5～8・14・21・22、第7図65・69・75・76・79・80・82～85、第8図99）

a種 連続する短沈線文あるいは連続刺突文が異なる二方向から施文され、重畠するもの（第4図1～3・5～7・14、第7図80・82～85、第8図99）

1は口縁直下に爪形状を呈する連続刺突文がハの字形に施文される。上の刺突の方がより深く施文される。下には角棒状の施文具の一端を押しつけ、断面が三角形を呈する刺突文がランダムに施文される。2・3・5～7・99は口縁直下からハの字形の連続する短沈線文が施文される。14は連続する短沈線文がハの字形に施され、その下に横位に連続刺突文と1条の沈線文が平行して施文される。80・82～84は、連続する短沈線文がハの字形に重畠して施される。85は、右斜め上方向からの連続する短沈線文と縦位に平行する短沈線文が交互に重畠して施される。

b種 連続する短沈線文あるいは連続刺突文が一方向から施文され、重畠するもの（第4図8・21・22、第7図69）

8は1条の横位沈線文を挟んで、上には角棒状の施文具による連続刺突文が3段に渡って施文され、下には3条の平行沈線文が縦位に施文される。21・22は頸部資料で、括れる部位に丸棒状の施文具による連続刺突文が3段に渡って施文される。69は、1条の斜位に

| 図・番号  | 部 位 | 分 類    | 文 样         | 器 面 調 整            | 胎 土・混入物の量    | 色 調    |
|-------|-----|--------|-------------|--------------------|--------------|--------|
| 第4図1  | 口縁部 | 第3類    | 刺突文         | 外面口縁横ナデ・胴斜めナデ      | 白色粗粒         | 中 暗茶褐色 |
| 第4図2  | 口縁部 | 第3類    | 刺突文         |                    | 白色細粒・輝石      | 中 明褐色  |
| 第4図3  | 口縁部 | 第3類    | 刺突文         | 外面下部指頭痕            | 輝石・白色細粒      | 少 茶褐色  |
| 第4図4  | 口縁部 | 第3類    | 沈線文・刺突文     | 内面ナデ               | 輝石           | 中 明茶褐色 |
| 第4図5  | 口縁部 | 第3類    | 刺突文         | 外面施文前横ナデ・内面ナデ      | 輝石・白色細粒      | 少 暗褐色  |
| 第4図6  | 口縁部 | 第3類・1類 | 刺突文・沈線文     | 外面施文前横ナデ・内面横ナデ     | 白色粗粒         | 少 暗灰褐色 |
| 第4図7  | 頸部  | 第3類    | 刺突文・沈線文・隆帯文 |                    | 白色粗粒・輝石      | 中 灰褐色  |
| 第4図8  | 口縁部 | 第3類    | 刺突文・沈線文     |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 灰褐色  |
| 第4図9  | 頸部  | 第4類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 明褐色  |
| 第4図10 | 口縁部 | 第1類    | 沈線文         | 外施文前斜ナデ・内斜ケズリ後横ナデ  | 輝石・石英        | 中 茶褐色  |
| 第4図11 | 頸部  | 第2類    | 沈線文         |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 暗褐色  |
| 第4図12 | 口縁部 | 第1類    | 沈線文         |                    | 輝石           | 少 暗褐色  |
| 第4図13 | 口縁部 | 第7類    | 口唇部外側刺突文    | 外面施文前横ナデ・内面横ナデ     | 白色粗粒         | 少 暗茶褐色 |
| 第4図14 | 口縁部 | 第3類    | 刺突文・沈線文     |                    | 白色粗粒・輝石・スコリア | 多 明茶褐色 |
| 第4図15 | 口縁部 | 第4類    | 沈線文         | 外面横ナデ・指頭痕・内面横ナデ    | 白色細粒・輝石      | 少 暗褐色  |
| 第4図16 | 口縁部 | 第7類    |             | 外面ナデ・内面横ナデ         | 白色細粒         | 中 赤褐色  |
| 第4図17 | 頸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 石英・長石・輝石     | 多 暗灰褐色 |
| 第4図18 | 頸部  | 第2類    | 刺突文・沈線文・隆帯文 | 内面横ナデ              | 白色粗粒・長石      | 中 明茶褐色 |
| 第4図19 | 頸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 輝石・長石        | 中 暗褐色  |
| 第4図20 | 頸部  | 第1類    | 沈線文         | 外横ナデ・内屈曲上横ナデ・下横ケズリ | 石英・白色細粒      | 多 茶褐色  |
| 第4図21 | 頸部  | 第2類    | 刺突文         |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 暗灰褐色 |
| 第4図22 | 頸部  | 第1類・2類 | 刺突文・沈線文・隆帯文 | 内面屈曲部上横ナデ          | 白色粗粒・輝石      | 中 暗灰褐色 |
| 第5図23 | 胸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 白色粗粒・輝石      | 中 暗灰褐色 |
| 第5図24 | 頸部  | 第1類    | 沈線文         | 内面横ナデ              | 白色粗粒・長石・輝石   | 多 暗茶褐色 |
| 第5図25 | 胸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 暗灰褐色 |
| 第5図26 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 石英・白色粗粒・輝石   | 多 明茶褐色 |
| 第5図27 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面横ナデ              | 白色粗粒・長石      | 少 明茶褐色 |
| 第5図28 | 胸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 白色粗粒・石英・輝石   | 中 茶褐色  |
| 第5図29 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 明茶褐色 |
| 第5図30 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 内面ナデ               | 白色粗粒・輝石      | 中 赤褐色  |
| 第5図31 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 内面横ナデ              | 輝石・石英        | 中 茶褐色  |
| 第5図32 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 赤褐色  |
| 第5図33 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色粗粒・輝石      | 中 赤褐色  |
| 第5図34 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面施文前横ナデ・内面斜めナデ    | 長石           | 少 明褐色  |
| 第5図35 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面横ナデ・内面斜めケズリ      | 白色細粒・石英      | 少 明茶褐色 |
| 第5図36 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 輝石・スコリア・白色細粒 | 多 明褐色  |
| 第5図37 | 胸部  | 第1類・2類 | 沈線文・刺突文     | 外面施文前横ミガキ・内面横ミガキ   | スコリア・白色細粒・輝石 | 中 暗褐色  |
| 第5図38 | 胸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 | 内面斜めナデ             | 白色細粒・石英・輝石   | 多 赤褐色  |
| 第5図39 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色細粒         | 少 明茶褐色 |
| 第5図40 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色細粒・輝石      | 多 暗茶褐色 |
| 第5図41 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色細粒・石英・輝石   | 多 明褐色  |
| 第5図42 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面施文斜めナデ           | 白色細粒・長石・輝石   | 中 赤褐色  |
| 第5図43 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面施文斜めナデ           | 白色細粒・長石・輝石   | 中 赤褐色  |
| 第5図44 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面施文前ナデ・内面凹凸       | 白色粗粒・長石      | 中 暗褐色  |
| 第6図45 | 胸部  | 第1類    | 沈線文         |                    | 白色粗粒・スコリア・輝石 | 少 明褐色  |
| 第6図46 | 胸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文前横ナデ・内面横ナデ     | 白色細粒         | 少 暗褐色  |
| 第6図47 | 胸部  | 第1類・2類 | 沈線文・刺突文     | 内面斜めミガキ            | 石英           | 少 灰褐色  |
| 第6図48 | 胸部  | 第1類・2類 | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒         | 中 灰褐色  |
| 第6図49 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文前ナデ・内面ナデ       | 白色細粒・長石      | 中 暗褐色  |
| 第6図50 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文前ミガキ・内面横ミガキ    | 白色細粒         | 少 暗褐色  |
| 第6図51 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文前ナデ・内面ナデ       | 輝石・白色細粒      | 中 赤褐色  |
| 第6図52 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒・スコリア・輝石 | 中 暗灰褐色 |
| 第6図53 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒・長石・輝石   | 多 明茶褐色 |
| 第6図54 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 輝石・長石        | 中 明茶褐色 |
| 第6図55 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 長石・輝石        | 中 赤褐色  |
| 第6図56 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒・長石      | 中 暗褐色  |
| 第6図57 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒         | 中 暗褐色  |
| 第6図58 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒・長石      | 中 明茶褐色 |
| 第6図59 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒・長石      | 中 灰褐色  |
| 第6図60 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                    | 白色細粒・石英・輝石   | 多 赤褐色  |
| 第6図61 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・隆帯文     |                    | 輝石・白色細粒      | 多 明茶褐色 |
| 第6図62 | 胸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文斜めナデ           | 白色細粒・石英      | 多 灰褐色  |
| 第6図63 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 輝石・白色細粒      | 中 明茶褐色 |
| 第7図64 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文前横ナデ・内面斜めナデ    | 白色粗粒         | 中 赤褐色  |
| 第7図65 | 頸部  | 第3類    | 刺突文・隆帯文     | 外面施文前ナデ・隆帯間縫ナデ     | 白色細粒・輝石      | 少 赤褐色  |
| 第7図66 | 頸部  | 第1類    | 沈線文         | 外面施文前縫ナデ・内面縫ナデ     | 石英           | 少 暗褐色  |
| 第7図67 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     | 外面施文前横ナデ・内面横ナデ     |              | 稀 明褐色  |
| 第7図68 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 長石・白色細粒      | 中 茶褐色  |
| 第7図69 | 口縁部 | 第1類    | 刺突文・沈線文     | 外面施文前ナデ・内面ミガキ      | 白色細粒・石英      | 中 茶褐色  |
| 第7図70 | 胸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色粗粒・長石・輝石   | 多 暗灰褐色 |
| 第7図71 | 頸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文     |                    | 輝石・白色細粒      | 多 赤褐色  |
| 第7図72 | 頸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文     |                    | 輝石・白色粗粒      | 中 赤褐色  |
| 第7図73 | 頸部  | 第1類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色粗粒・輝石・長石   | 多 茶褐色  |
| 第7図74 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色粗粒・輝石      | 中 茶褐色  |
| 第7図75 | 頸部  | 第3類    | 刺突文         |                    | 白色粗粒・輝石・スコリア | 多 茶褐色  |
| 第7図76 | 頸部  | 第3類    | 刺突文         | 外面施文前斜めケズリ・内面横ナデ   | 白色細粒・輝石・長石   | 中 赤褐色  |
| 第7図77 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色細粒・輝石      | 中 赤褐色  |
| 第7図78 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     |                    | 白色粗粒・輝石      | 多 暗灰褐色 |
| 第7図79 | 頸部  | 第3類    | 刺突文・隆帯文     |                    | 白色粗粒・長石・輝石   | 多 茶褐色  |
| 第7図80 | 頸部  | 第3類    | 刺突文         | 外面施文前横ナデ           | 白色細粒・長石・輝石   | 多 茶褐色  |
| 第7図81 | 頸部  | 第2類    | 沈線文・刺突文     | 内面ナデ               | 白色粗粒         | 中 暗灰褐色 |
| 第7図82 | 頸部  | 第3類    | 刺突文         | 外面施文前斜めナデ          | 輝石・白色細粒      | 中 赤褐色  |
| 第7図83 | 頸部  | 第3類    | 刺突文         | 外面施文前斜めナデ          | 白色細粒・長石・輝石   | 多 明茶褐色 |
| 第7図84 | 頸部  | 第3類    | 刺突文         | 外面施文前斜めナデ          | 白色細粒・長石      | 中 暗茶褐色 |

第1表 マンガリュー遺跡出土土器観察表(1)

| 図・番号   | 部 位 | 分 類 | 文 様         | 器 面 調 整         | 胎 土・混入物の量  | 色 調    |
|--------|-----|-----|-------------|-----------------|------------|--------|
| 第7図85  | 肩部  | 第3類 | 刺突文         |                 | 白色細粒・輝石    | 多 暗茶褐色 |
| 第7図86  | 肩部  | 第4類 | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                 | 白色細粒・輝石・長石 | 中 明茶褐色 |
| 第8図87  | 肩部  | 第4類 | 沈線文・刺突文・隆帯文 | 内面横ナデ           | 輝石         | 中 暗灰褐色 |
| 第8図88  | 肩部  | 第4類 | 沈線文・刺突文・隆帯文 |                 | 白色細粒・輝石・長石 | 中 暗灰褐色 |
| 第8図89  | 肩部  | 第4類 | 沈線文・刺突文・隆帯文 | 内面横ナデ           | 輝石         | 少 茶褐色  |
| 第8図90  | 肩部  | 第1類 | 沈線文・刺突文・隆帯文 | 外面施文前横ナデ・内面斜めナデ | 白色細粒・長石    | 中 明茶褐色 |
| 第8図91  | 肩部  | 第2類 | 刺突文・隆帯文・沈線文 |                 | 輝石・石英・白色細粒 | 多 茶褐色  |
| 第8図92  | 肩部  | 第2類 | 刺突文・隆帯文・沈線文 | 外面施文後横ナデ        | 輝石・白色細粒    | 中 明茶褐色 |
| 第8図93  | 肩部  | 第4類 | 沈線文         |                 | 輝石・白色粗粒・長石 | 多 茶褐色  |
| 第8図94  | 肩部  | 第4類 | 沈線文         | 外面施文後ナデ         | 白色細粒・長石・石英 | 多 赤褐色  |
| 第8図95  | 肩部  | 第4類 | 沈線文         | 内面ナデ            | 輝石・白色細粒・長石 | 中 赤褐色  |
| 第8図96  | 肩部  | 第4類 | 沈線文         |                 | 白色細粒・輝石・長石 | 中 暗茶褐色 |
| 第8図97  | 肩部  | 第6類 | 貝袋表圧痕文      | 内面斜めナデ          | 輝石         | 少 暗褐色  |
| 第8図98  | 肩部  | 第5類 | 貼付文・刺突文     | 外面施文前縫ナデ・内面横ナデ  | 長石・白色細粒    | 少 暗茶褐色 |
| 第8図99  | 口縁部 | 第3類 | 口唇外側刺突文・刺突文 | 外面施文前横ナデ・内面ナデ   | 長石・白色細粒・輝石 | 多 明褐色  |
| 第8図100 | 肩部  | 第4類 | 沈線文         | 外面施文前斜めナデ・内面横ナデ | 白色細粒・長石・輝石 | 多 明茶褐色 |
| 第8図101 | 底部  | 第2類 | 沈線文・刺突文     |                 | 白色細粒・長石・輝石 | 中 灰褐色  |
| 第8図102 | 底部  | 第2類 | 沈線文・刺突文     |                 | 輝石・白色細粒・長石 | 多 赤褐色  |
| 第8図103 | 底部  | 第7類 |             |                 | 白色細粒・輝石    | 多 赤褐色  |

第2表 マンガリュー遺跡出土土器観察表(2)

施される沈線文の右側のスペースに右斜め上方向からの連続刺突文が重畠して施される。

c種 連続する短沈線文あるいは連続刺突文が縦または斜め方向に展開するもの（第7図64・75・76・79）

64は逆ハの字状を呈す連続刺突文が縦位に施される。75は左斜め上方から連続刺突文が施される。76は右斜め上方から条線状のナデ調整が施された後、ハの字形の連続する短沈線文が縦位に連続して施される。79は、縦位隆帯間のスペースに半截竹管状の工具によると思われる短沈線文が縦位に連続して施される。

第4類 平行沈線文で主体的に文様が構成されるもの（第4図9・15、第5図43、第7図86、第8図89・93・96・100）

a種 山形または菱形の意匠を示すもの（第4図9、第5図43、第8図93・94・96）

9は、1条の刻み目の付く横位隆帯を挟んで上には3条一単位の短沈線文がハの字形に施され、下には平行沈線文が縦位に施される。43は、2条の縦位平行沈線文の間に2条の平行沈線文が斜位に施される。93・96は、2条一単位の平行沈線文で三角形または菱形の意匠が表される。94は、6条以上の平行沈線文で山形の意匠が表される。

b種 平行沈線文が重畠するもの（第8図95）

95は3条または4条を一単位とする平行沈線文が重畠して施される。

c種 縦または斜め方向に連続するもの（第4図15、第7図86、第8図87～89）

15は、先の尖った口唇を呈し、右斜め上方から2条の平行沈線文が施される。86・88は刻み目の付く横位隆帯の下に平行沈線文が縦位に施される。87・89は、3本一組の平行沈線文が縦位に施されている。

第5類 隆帯文以外の貼付文が施されるもの（第8図98）

98は、3mm程の大きさの橢円形の粘土粒が2、3mm程の間隔をおいて横位に連続して貼り付けられ、その下には短沈線文や刺突文がランダムに施される。下の割れ口付近には炭

化物が付着する。やや薄く石灰分が付着する。

#### 第6類 貝殻文が施されるもの（第8図97）

97は、おそらく二枚貝の表面を押捺したと思われる圧痕文が間隔をおいて施される。

#### 第7類 無文のもの（第4図13・16、第8図103）

13は、やや先の尖る口唇部を持ち、口唇外縁に連続刺突文が施される以外は無文である。口縁以下は横位に丁寧に調整されている。16は口唇が丸みを帯びる。内面は特に丁寧に調整されている。103は、無文の底部破片である。

## V 考察

本稿で紹介した資料は表面採集資料であることから、これらの資料そのものから土器の変遷を追うことは難しい。そこで、管見に触れる範囲でこれらの資料の編年的位置を考察していくことにしたい。

マンガッ式土器は、現在の時点では貼付文が含まれない沈線文と刺突文・短沈線文によって文様が構成される最古段階、連続しない貼付文や把手を特徴とする前期、様々な沈線文によるモチーフや連続する貼付文（隆帶文）を特徴とする後期に分けられる。今回紹介した資料にはそのいずれもが含まれている。

第4図13の口縁部形態および口唇に刻みが付くことや胴部が無文であるという特徴は、エファテ島東部のファケット遺跡やエポン川南岸遺跡で採集した土器（相原・中野ほか 1999）に類似し、エルエーティの土器や貼付文を含まない段階のマンガッ式土器にも共通する。この資料は、マンガッ式でも最古段階とされるものに位置づけられるものと思われる。他にマンガッ式最古段階と考えられる資料に、第2類a種の第4図11、第6図56～58、b種の第7図67・74、第3類c種の第7図76がある。特徴として、沈線や短沈線の幅がやや広く、深く施されていることや沈線文が全体的に粗雑で大振りであることが挙げられる。これはファケット遺跡の資料やマンガッ式遺跡の資料にもいえることである。

第8図98は、採集資料の中で唯一連続しない貼付文が施された土器である。ガランジェの言うところの前期マンガッ式土器に相当するものであろう。この土器に伴う可能性のある土器としては、第2類のb種・c種が挙げられる。その根拠は、ガランジェ報文に示された土器の写真に、これらのモチーフが連続しない瘤状の貼付文と組合わさっているものが多く存在することによる。また、このモチーフは貼付文が組成に含まれない段階にも存在しており、より古い様相を示すと思われる。

いずれにしても、今回紹介した資料の主体を占めるのは第1類の区画文によって文様が構成されるもので、後期マンガッ式土器に位置づけられるものが多い。第1類の区画文

や第2類の2条の平行沈線文内に連続刺突文を施すものや第3類のハの字形に重畠する刺突文などは、後期マンガッシ式土器の中にも幾つかの文様の系統が存在することを示している。その細かい検討は今後のメレの土器の分析の中でまとめていくことにしたい。

〔謝辞〕

筆者らがメレで行った調査は、ゼンリン株式会社、パオ・ネット・ワーク、太平洋学会からの一部資金援助を受けて実施され、慶應大学教授近森 正氏をはじめとする日本からの15名の有志参加('97)、アメリカ合衆国からの2名の有志参加があった。また、バヌアツ共和国国立文化センターや、同じ時期にマンガッシ遺跡の調査をしていた国立オーストラリア大学教授のマシュー・スプリッギス氏をはじめとする多くの方々から数々のご教授やご支援を賜った。深く感謝申し上げる次第です。また、東北大学名誉教授の芹沢長介先生からもご指導を賜りました。ここに改めて御礼申し上げます。

※本稿は標記の4名による共同研究の成果をまとめたものである。なお、最終的な文責は、中野拓大が負う。

## SUMMARY

### A Preliminary Consideration of the Mangaasi-type Pottery Collection from the Mangaliliu Site in Vanuatu

The Mangaasi represents one of the incised and applied pottery types that occurred during the pre-historic period in Melanesia. This type of pottery from Vanuatu has been studied by Professor Jose Garanger of the Universite de Paris I, France. Garanger classified this pottery into "early" and "late" Mangaasi. Results from recent excavations in Mangaasi by the Australian National University indicate that applied relief appears only at the end of the ceramic sequence and that incised pottery without applied relief predates the "Early Mangaasi-type." according to the radiocarbon and stratigraphic data.

Mangaliliu occurs near the Mangaasi site on the northwest coast of Efate Island. The Mangaliliu assemblage consists primarily of the "Late Mangaasi-type" and "Early Mangaasi-type" pottery appears to be only minimally represented. The majority of the analyzed sherds were recovered through surface collections. The absence of provenience and other contextual data preclude discussion of chronology or temporal sequence.

〔主要参考文献〕

- Garanger, José ; 1971 'Incised and Applied-Relief Pottery, Its Chronology Development in South-western Melanesia, and Extra Areal Comparisons' "Studies in Oceanic Culture History, vol. 2 "R. C. Green and M. Kelly, eds. Pacific Anthropological Records 12 : pp. 53-66
- Garanger, José ; 1972 'Archaeologie des Nouvelles-Hebrides' "Publications de la Socite des Oceanistes" No. 30, Fig. 33, Musée de l'Homme
- 木口裕史；1997「エファテ島メレ村表採土器の考察」'97メレ・プロジェクト研究協議会発表要旨、東京 Peter, Bellwood ; 1978 "Man's Conquest of the Pacific"
- (邦訳/植木 武・服部研二訳；1989『太平洋一東南アジアとオセアニアの人類文化史』法政大学出版局、東京)
- R. P. Ash, J. N. Carney, and A. Macfarlane ; 1978 "Geology of Efate and Offshore Island" New Hebrides Condominium Geological Survey, Vila, New Hebrides
- Richard M. Bordner ; 1982 "A Stylistic Analysis of the Mangaasi Tradition, Central Vanuatu", A Thesis submitted to the Graduate Division of the University of Hawaii in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Master of Arts in Anthropology
- 芹沢長介；1972「メラネシアのエファト島から発見された縄文ある土器について」『考古学ノート』第2号、pp. 1—3、武蔵野文化協会考古学部会、東京
- 篠遠喜彦;1979「オセアニア」『世界考古学事典』、pp.1539-1556、平凡社、東京
- Sinoto,Yoshihiko H ; 1992' A Review of the Expansion of Austronesian Speaking Populations in Oceania, and Problems of East Polynesians Settlement. With a note on the existence of artifacts similar to those of the Jomon Culture in Oceania. "International Symposium" 4, pp. 204-224, International Research Center For Japanese Studies, 京都
- Sinoto, Y. H., R. Shutler, W. Dickinson, M. E. Shutler, J. Garanger and T. M. Teska ; 1996 "Was there a Pre-Lapita, Japanese Jomon, Cord-marked Pottery Occupations in Vanuatu?" A paper read at the Western Pacific Conference, Port Vila, Vanuatu.
- Sinoto, Y. H. ; 1996 'Summary of Petrographic and Electron Microprobe Analyses of Mele Cord-Marked Sherds' WRD3/18/96、as revised with Petro Rpt WR D-122、et al Mele paper for Port Vila Conference
- 篠遠喜彦；1998「太平洋渡った縄文文化」海と文明 / 5、読売新聞98.1.8 .
- 印東道子；1993「メラネシア 一文化の回廊地帯」『オセアニア① 島嶼に生きる』、pp.101—114、東京 大学出版会、東京
- J. C. Galipaud ; 1996 'Pottery and Potters of Vanuatu' "ARTS OF VA-NUATU", PP.94-99、Crawford House Publishing、Australia
- S. Bedford, M. Spriggs, M. Wilson, R. Regenvanu ; 1998 'The Australian National University-National Museum of Vanuatu Archaeology Project: A Preliminary Report on the Establish of Cultural Sequences and Rock Art Research'
- 相原淳一・中野拓大・磯目隆夫・篠遠喜彦 1999「中部バヌアツ・エファテ島東海岸における考古学的踏査」『仙台市博物館調査研究報告』第19号、仙台市博物館、宮城